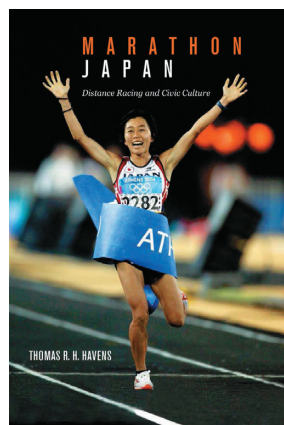


トーマス・R・H・ヘイヴンズ

『マラソンジャパン——長距離走と市民文化』

Thomas R. H. Havens, *Marathon Japan: Distance Racing and Civic Culture*

牛村 圭



University of Hawai'i Press, 2015

晩秋から冬に日本を訪れてみれば、いたるところで多くのマラソン大会が挙行されていることにまず間違いなく気づく。最も耳目を引くのは、毎年二月開催の東京マラソンだろう。エリートランナーのみならず相当数の市民ランナーまでが、沿道の観衆の声援を受けてマラソン大会に参加している。当今の日本では見慣れた光景である。だが市民ランナーがエリートランナーとともに同一大会へ参加することが認められてからは、まだ歴史が浅い。それはつい最近——二〇〇〇年代に変わる直前——のことにすぎない。それ以前は、日本陸上競技連盟（JAAF）から記録を公認されるマラソン競技会は、一握りの海外からの招待選手に加え国内の企業や大学のチーム所属の競技者、すなわちエリートランナー限定だった。

一方、エリートランナーに用意されるマラソン競技会は、明治時代にまで遡る一世紀の歴史を有する。一九一二年開催予定の第五回オリンピック（ストックホルム大会）への参加を要請された日本は、前年の一九一一年十一月に派遣選手選考会を実施、スウェーデンへ送る二名の競技者を決定した。短距離走者（三島彌彦）と東京高等師範学校生徒の長距離走者の金栗四三だった。当時東京高等師範では、著名な教育者であり熱心な柔道家の嘉納治五郎が校長を務めていた。ストックホルム大会において、金栗は高温多湿の過酷な条件のもと——落命した参加者も一名出たほどだった——でのマラソンを完走することはかなわなかったが、そののち二大会（一九二〇年のアントワープ大会、一九二四年のパリ大会）続けてオリンピック出場を果たし、一方では後進の指導にあたり成

功を収めた。「日本マラソンの父」として令名高い。

第二次大戦後、日本は傑出したマラソン走者を徐々に輩出し始めた。円谷幸吉（一九六四年東京大会）、君原健二（一九六八年メキシコシティー大会）のように五輪メダリストも出た一方、ミスターマラソンと呼ばれた瀬古利彦や中山竹通たちは時に素晴らしいレコードを出しながらも、メダリストには成り得なかった。同様に注目に値することは、一九八〇年前後の佐々木七恵や増田明美を嚆矢とし、一九九〇年代の有森裕子、そして二〇〇〇年代の高橋尚子や野口みずきへと至る女性マラソン走者の台頭だろう。有森は一九九二年（バルセロナ大会）、一九九六年（アトランタ大会）と二大会連続でメダルを得、高橋は二〇〇〇年（シドニー大会）、野口は二〇〇四年（アテネ大会）の五輪でそれぞれ金メダルに輝いた。しかしながら、野口が世界の頂点に立つて以来、日本はオリンピックにそのつど選手を派遣してはいるものの、メダリストを出してはいない。とりわけ男性マラソン走者の場合、アフリカ勢が打ちたたてた最近の記録からは大きく引き離されている。

『マラソンジャパン——長距離走と市民文化』は、驚くほど綿密な調査から成る一書である。現役を退いた選手や指導者へのインタビューはもとより、浩瀚な諸資料や関係図書の詳細に基づいて構成される本書は、時系列に沿いつつ長距離走をめぐる日本の伝統と文化へと読者を誘う。とりわけ力点がおかれているのは、長

距離走が一時的な流行から、絶えることのない日本文化の一区分へと変貌を遂げていくその過程である。

本書の叙述は、明治時代に始まる前掲のマラソンをめぐる歴史を描き出すことから始まる。そのさい、日本人気のあるもうひとつの長距離走である駅伝にも絶えず言及する。駅伝は大概十名以上の走者がたすきを渡して長距離を走り抜く競技である。マラソンと駅伝を並置することにより、日本のマラソンランナーの記録が昨今頭打ちになっているのは、日本では駅伝にあまりにもこだわりすぎているためではないかという、頻繁に論じられる話題へと読者の思索を向けているのかもしれない。この議論の背後には、企業や大学所属の長距離ランナーは駅伝をマラソンより優先させるため、マラソンへの備えが十分ではないという広く行き渡っている見解がある。長きにわたるこの議論に対して、著者ヘイヴンズ教授は著名な駅伝指導者のコメントを引くことで自説を提示しているように思える——「外国人のマラソンランナー以上に日本のエリートランナーたちは多くのマラソン競走に出場している」と主張することで、その指導者は、駅伝を走っているからこそ、マラソン競走をレース途中で棄権することがめつたにないのだと考えている」（p. 169）。

広範囲に及ぶ調査に負けず劣らず驚嘆に値するのは、本書が採る包括的なアプローチであり、これにより著者が多領域に通じて

いることが証されている。「自由に参加申し込みできる駅伝やマラソンは、誰にとつても地域の行事になっていると市井しせいの人たちは主張してきており、百年前には限定された大学で上級階級の男たちによつて牛耳られていたスポーツが、こうして完全に民主化されたのである」と書く時、ヘイヴンズ教授は思想史家である。同時に、高橋尚子に言い及ぶにあたり「きわめて無駄のない足取りとほとんど上下動のない疾走フォームのため、一方の脚が舗装路に触れたときにはもう一方のシューズの裏側が後続ランナーには見えないくらいになっている」と書く時、著者は傑出したスポーツライターであることを自ら証している。

記しておくに値するさらなる特徴は、著者が各資料を扱うさい、読者にとつての読みやすさを念頭において書くことを心がけている点であろう。一例を引くなら、特定の競技者のレコードに言い及ぶにあたり、著者はそのレコードを通時的観点ばかりか共時的視点からも論じている。すなわち、当該競技者の自己レコードの変遷という視点から考察するに止まらず、同時代のコンテクストにおいてもその記録に検討を加えている。したがって読者は、著者が言及している当該レコードをどう判断すればよいのか苦勞することはない。とは言え、日本出身としてはじめてオリンピックのマラソンでメダリストとなった円谷幸吉について「陸上自衛隊の二等陸尉である円谷は、スポーツへの情熱と一九三〇年代以来

の日本軍との密接な絆の範を垂れた」と記すさい、著者の洞察は行きすぎたように思える。というのも自衛隊は昔日の日本軍とはまったく別物であるためである。

『マラソンジャパン』のなかで、もつとも印象的でまた教えられることの多いのは、長距離走という市民文化の展開を詳細に論じている箇所であろう。そのさい著者は谷川真理と高橋尚子というふたりの女性エリートランナーに特に重きを置いている。谷川は高橋ほど海外では知られてはいない。ごく普通の事務職員であった谷川は、二十四歳時に皇居周回のジョギングを始め、最後には東京（一九九一年）そしてパリ（一九九四年）と国際マラソンを走り抜いた。一躍スターとなり「一般市民にランニングの愉樂を強く教え込む、すぐれた競技者の一人となった」（p.105）。谷川は、エリートランナーの長距離走と何万人もの市民が参加できるマラソン大会をつなぐ重要な役割を担っている。後者の縮図とも言えるのが東京マラソンである。対照的に高橋は、当初よりエリートランナーであり、金メダルを手にするという夢を成就し、母国の有名人となった。「高橋の」オリンピックでの勝利と明るい性格とがとりわけ若い女性の間でランニングへの関心をさらに増すこととなった。それは二〇〇〇年代初期においては他のどの要因も成し得ないものだった」（p.112）。谷川真理と高橋尚子がいなかったならば、二〇〇七年の東京マラソンで頂点に達した現在の市民

マラソン熱は、果たしてあり得たことだろうか、と思う向きもある。

本書の語りは十分説得力を持って迫ってくるものの、さらに充実させることもできただろう。たとえば、瀬古利彦や宗兄弟、それにバルセロナ大会で銀メダルを獲得した森下広一といった男性エリートランナーたちが、市民マラソン熱のきっかけとなることも普及に貢献することもなかったのはなぜなのかについて論じることでもできたであろうし、スランプに喘ぐ現在のエリートランナーたちへのより具体的な提言や解決策をも提示することもできたのではないか。著者が示す処方箋は以下に止まっている——

「野口〔みずき〕の自己抑制と川内〔優輝〕の因習への穏やかな反抗との融合こそが、日本のエリートランナーたちが現在の頭打ち状態から次なる達成の頂きへと至るために採るべきアプローチではないか」(p.140)。

終始一貫して文体は明瞭、時折長距離走者の脚の運びをも連想させるほどにリズムカルでさえある。書評者自身、半世紀近く陸上競技に携わってきた。その視点から、『マラソンジャパン』がマラソン以外の陸上競技種目の歴史についても詳しく触れており、このテーマについては日本語で書かれたものも含めた類書のなかで最良の一書と認めることに吝かではない。

『マラソンジャパン』は、何百にも及ぶ日本の人名や地名を扱っ

ている。そして類書とは異なりその読み方の正確さには驚くばかりである。ヘイヴンズ教授の細部にも注意が行き届いた叙述に、読者は必ずや感銘することであろう。せいぜい書評者にできることといえば、二点些細な勘違いを指摘することくらいにすぎない——「相馬勘次郎」ではなく「相島勘次郎」(p.333)、「東京での勝田国民マラソン大会」ではなく「茨城での勝田国民マラソン大会」(p.143)。

*本稿の初出は *Japan Review* 31 (2017) に掲載された英文テキストである。